

2173再構築 20

7 ネットワーク : 勝利
エリー

7 ネットワーク:勝利

<調べた言葉>

しょうり〔勝利〕

たたかい〔戦い・闘い〕

せんそう〔戦争〕

ぎげい〔技芸〕

ゆうれつ〔ゆうれつ〕

かつ〔勝つ〕

けいしょう〔継承〕

はんえい〔繁栄〕

くよう〔供養〕

てきざいてきしょ〔適材適所〕

勝利とは、敵がいたり、成功が保障されていなかったり、「負け」がある状態で、「勝ち」をおさめた時に言うようだ。

保護区でも、自由区でも、繁栄が問われるから、衰退は負けとなる。

保護区は、確立された技術を確実に継承していくための役割を担っている。

自由区は、新しい技術開発に挑戦して、世界をリードすることが求められる。

たとえば、日本の技術は世界に誇れる素晴らしいものだ、といっても、わたし自身は一つも継承していないから、同じように何も継承していない人ばかり増えたら、「昔は高度な文明があったけれど、今は衰退してしまった」という古代文明の謎みみたいな状態になってしまう。

自由に選んでよくて、好きなことをそれぞれが選んだ結果、必要が満たされなければ、結果的に自分も困る。

しかし、適材適所という考え方もあるし、自由があるから生まれるものもあるから、全員に強制するやり方は無理がある。

必要を求めて、それを拒んで自由を選ぶなら、上か、下かに分かれることになる。

つまり、求められる技術を身につけ、役割を果たす人を普通とするならば、その更に上に行く特別な状態と、必要も満たせず好きなことでも芽が出ない不遇の状態ができあがる。

真ん中、上、下という階層に分かれる。

わたしは、体力も技術もなく、必要を満たしていないから、今は下にいる。普通は望めないから、なんらかの方法で勝ち残り続けて、上にあがらなければ未来は暗い。

どこかで、勝ち上がれないだろうなと思っているから、行き詰って、路頭に迷う日を不安に思っている。

だから、「勝利」のイメージは自分の中にない。

それでも、必要を満たす人を真ん中に置いて、才能ある人を上に置いて、どうにもならない人を下に置くことは、仕方がないことだと思う。結果を平等にしようと思ったら、「出来ない」と言い続けてやらなければ、それで済んでしまう。結果的に国力が衰退して、自分自身の身も危うくなる。

栄えている国で底辺にいるのと、栄えていない国で底辺にいるのでは、比べ物にならない。栄えている国にいる方が、生きやすい。

必要なことがマイナスの労働である場合、一生懸命尽くしても、給料が上がることは期待できない。たとえば、介護や看護や育児や家事や、広く言えば教育もそうだろう。

生活を守り、生きていく力を育てるという意味では、役立つ必要なことだが、消費される労働であって、生産する労働ではない。

モノやサービスを提供するプラスの労働は、なかったものが生まれて、それを利用することで便利になったり変化があらわれる。道路や鉄道網の整備など、インフラを作り、メンテナンスすることはプラスの労働と言える。

食糧生産もプラスと言える。生産力があれば、人口が増えて、力が増すことが考えられるから。

それでも、食糧は食べたらなくなるし、インフラも老朽化する。永遠ではない。更新し続けなければならない。そういう意味では、「すべき仕事」はずっとある。

たとえば、工場は生産する手段だが、住宅は生産手段ではない。それでもなければ困る。

しかし、災害の多いこの国で、自分の家を持つことはリスクが高い。多重ローンを抱えることになるかもしれない。

個人的な趣味を問わず、大量生産で画一的な個人単位の住宅を供給することで、災害が起きても、再び家に住める状態が保障されるなら、それでもいいという人は出てくるだろう。

13～15歳の子どもは、単純労働をする立場にある。

試験に受ければ、任されることが変わるが、最初の3ヶ月は、みんなラインにつく。具体的な作業をする。

そこから、希望の職種に分かれていく。

そこで身につけた技術は、自由区でも生かされる。

もっと勉強したければ、管理区の試験を受けて、働きながら勉強することになる。

技術者としてスキルを身につけることも、管理職として技術を身につけることも、自由に自分で選択することができるが、試験に受からなければ単純労働のまま終わる。

最後にもらえる報酬は30万と決まっているが、卒寮証明書のスキル証明欄に違いが出てくる。成績が良くて、高いスキル認定を受ければ、一生の財産となる。

その分、自分が選ばなかったことは、選びにくくなってしまいが、自分で決めて、自分で努力しなければ、未来はない。

自分を知り、得意なことを生かすための場として、7~12歳の間、保護区でお小遣いをもらうために大人相手に働くことになる。

雑用をするのか、エンタテイメントで勝負するのか、勉強を頑張って大人の助手的な役割を果たすのか、山仕事や給食の仕事を手伝うのか、それは、自分で道を見つけるしかない。

そこで見つけられず、自分は言われたことを言われたとおりにしか出来ないと気づけば、指示してくれる人がいる場所に行くことを自然に選ぶだろう。

仕事を想像して、どんどん儲けることができたなら、自由区で起業したり、大きな組織に所属してでかい仕事に取り組んだりするだろう。

自信がなくて、前へ、前へとすすめなかったり、自分の才能が分からず、生きる道が見つからなかったりすることは多いわけだけでも、自分がどんなタイプなのかは、小さいうちからでも分かると思う。

頑張れば何にでもなれるなんて嘘だから、自分の限界は早く知った方がいいと思う。

向き・不向きは確実にある。向かないことを頑張っても普通以下にしか出来ないなら、向いたことを続ける方がいい。

しかし、向かないことは難しさに気づかず、フォローしてくれる人がいるなら楽に仕事ができるから続く。

向いた仕事は、あれもしなければ、これもしなければと気づいてしまうから、かえって向いてないような気持ちになることがある。責任を感じ過ぎて辛くなってしまう。

わたしは、自分の夢を叶えるために、自分が技術者になるしかないと考えて、プログラムの学校に入った。しかし、言われたことがなんとなく分かるだけで、更に工夫してよくすることはできなかった。それでは仕事にならないし、向かないということ。それは通学しながらうっすら気づいていた。

まだ、その前に勤めていた、パソコンで印刷の元を作る仕事の方が向いていた。「こうすればイメージ通りできるだろう」と操作の仕方を思いついて、自分で工夫して提案することができたから。

でもわたしは、夢を追ってやめてしまった。

そして、妊娠・出産で不調になって、すべて失ってしまった。

それでもなんとか暮らせているのは、親がいるから。

体も心も弱ってしまった今、こうして好きなことを、休み休みする以外に、何もやりようがなくなってしまった。

そして、今でもまだ夢を追っている。

それが無謀な道であることは、やっている自分が一番よく分かっている。たぶん、どうにもならないだろうと分かっている、それでもそれしかできないから、何もしないのも退屈なので続けている。

もし、働ける体力があったなら、夢から逃げて、お金を稼ぐことをしたと思う。でも、下痢や吐き気が止まらず、勤めることは無理だから、考えてもどうにもならないことを考える。

もしも、活路があるとするならば、問題点を把握して、指摘して、改善の仕方を提案できた時だろう。厳しいことも言わねばならず、迷うことも多く、辛い道のりだが、他にすることがない。

。

自分では思いつかず、言われたことを言われた通りにするだけなら、もうけは少ない。

「勝ち」と「負け」なら、「負け」の方に含まれる。

それでも、それが意味のある労働であるなら、加護を与えて守らねばならないと思う。

それは、いわゆる「普通の人」で弱者ではない。

覚えた一つのことを武器に、働けば一生食べることに困らない安心を得られることこそが「福祉」ではないだろうか。

引退した人の生活を守るために、現役時代に世話するから、自分も世話してもらえる。

自立したもの同士が、間接的に支え合う関係を福祉と呼ぶのではないだろうか。

お互いに自由であるためには、自分の身の周りのことは、自分でしなければならない。だから、大人は一人で暮らす。12歳以下の子どもは大人と暮らす。13～15歳は寮で世話を受けながら自立の準備をして、16歳から一人前の大人として一人で暮らす。

洗濯は洗濯機がしてくれるし、掃除は掃除機がある。健康ならば、自分で自分の面倒を見ることは大変ではない。だから、個人単位で生活する。

男女平等に、自分のことは自分でして、さらにみんなのことを少しずつ負担することで成り立つ世界が保護区。

自由区は、儲けたお金で、世話してくれる人を雇う自由がある。

働き手と家事に分かれることもできる。

一人で暮らすこともできる。

保護区と違って、選択の幅がある。

「何もしてこなければ、何もしてもらえない」を前提にしなければ、結局、誰も守れないのではないだろうか。

モノのように扱われて、人として扱われなかった過去があるから、どんな人も同じに扱うというルールができた。

しかし、何もしない人が増えれば、何かした人が、間接的に支えることになって、逆に不平等になる。

「優秀なんだから、支えて当然！」となったら、それはモノ扱いしているのと同じだと思う。

「働けるが、何をすればいいかわからない」を「加護すべき国民」とした場合、仕事を生み出す人は指導者となる。

指導者には誰でもなれるわけではない。

やってみないとわからない部分が多い。勝利に導くか、失敗に終わるか、天下分け目の大勝負を握っている。

政治でも、経済でも、リーダーがでなければ、多くの人は困ってしまう。

「負けないこと」を第一に、堅実に導くリーダーが保護区を運営する。多くの人の知恵を生かしつつ、全体をまとめる人物が必要になる。

「勝つこと」を求めて、負ける可能性を引き受けて、挑戦する個人を中心とした、大小さまざまな集団が、競い合うのが、自由区。負ければ、自己責任を問われる。リーダーにはなれないが、自分の才能を生かしたい人は、どの組織に所属するかを自ら選ぶことができる。お互いに認め合えば仲間になる。どこにも所属せず、フリーランスとして活躍する方法もある。

何もしないで、だらだらする人を、家族が支える義務はない。12歳まで育てた段階で、親としての義務は果たしている。13歳からは自分の力で生きていくことが求められる。

それでも、手を差し伸べる親は出てくるだろう。

あるいは、自分の後を継がせるために、エリート教育をする親も出てくるだろう。

7～12歳の間に保護区に入れば教育が与えられるが、自由区にいたら、何も与えられない。もし、自分は保護区に入らず、子どもだけを保護区に預けることを選んだなら、6歳まで育てればよいことになる。あとは、公共の力で15歳まで育てられる。

親の義務としては、13歳で入寮させなければ罰が与えられる。

しかし、入寮した子どもが、自らの意志で逃亡しても罰はない。ただ保護区に入れなかったり、サポート労働者になれなかったりするだけ。

食糧や木材を育てて、資源を提供することが、保護区の基幹産業。主に山奥にある。漁業は博打なので、自由区。

管理区は、都市部にあつて、働けないが働く意志を持つ弱者を守ることと、リーダーを育てることをする。研究開発機関や、子どもたちの寮や工場などがある。

自由区は、自由区の会社で働く人と、管理区のサポート労働者として働く人に分かれる。サポート労働者は、失業しにくく、安定しているが、給料が安い。そして、卒寮資格がなければ就けない。

何をすればいいのかわからない人に、やるべきことを教えて、働く場所を提供するのが保護区。節制を美德として、儉約に努める。

お小遣いが月に5万円もらえるので、その範囲で好きなものを自由区から買うことができる。最高30万までためることができる。

持ち込めるものに制限があるので、ネットサービスを買ったり、食料品や嗜好品を買ったりする人が多い。コレクター的なことは難しい。

「こうしたらいいのに！」と自分からどんどん工夫できることがあつて、才能を生かして、お金をもうけられる、経済的自立のある世界が自由区。選択する自由があるかわりに、結果に対する責任も負う。

老後は保障されていない。お金を貯めたり、保険に入るなどして、工夫することが求められる。

管理区は弱者とそれを世話する人と、エリートがいる場所。

自由区で挑戦してみて、自分には才能がないと思えば、与えられたことを受け入れ、指導者の元で働く暮らしに納得するだろう。

このままでは困ると分かつていて、なお、自由でいたいなら、それを強制して守るより、死ぬに任せた方が、お互いのためではないだろうか。自由区には、死んだら火葬してくれる死の街がある。

たとえば、「起きたくても、起きられない」という場合、弱者に認定するのかという問題が出てくる。

病気なのか、意志の問題なのか、他人には分からない。本人にも分からないかもしれない。ともかく、働くことは難しい。

保護区では、決められた時間に食事が提供されるので、昼夜逆転した生活は認められない。管理区のグループ生活でも、やっぱりルールはあるので、守らなければ入ることはできない。入寮から卒業まで昼夜逆転状態が続いているならば、「資格なし」の烙印を押されることになる。

すると必然的に自由区で生きるしかなくなる。
労働の報酬の30万円ももらうことができない。

昼夜逆転状態でもできる仕事が見つかれば、なんとか生きていけるだろう。
でももし、仕事が見つからなくて、親も手を差し伸べられる状態になかったなら？
家を借りることはできないから、路上生活をすることになる。

そういう人を守ることが福祉なのか、「ルールに従うか、自力で生きるか」を問うしかないのか、まだ迷っている。

しかし、2173再構築の中では、「それは福祉ではない」という前提で書くと決めている。

必要なことを満たし続けて負けないようにリードする政治的リーダーと、勝つことを求めて挑戦する経済的自立を与えられた個人の集まりがいて、どちらも「勝つこと」が求められている。

勝っても、負けても、結果平等が保障されるなら、勝つ意味がない。そもそも、全体として負けているなら、支援する力はないだろう。

勝たなければ負けてしまう。だから、勝ちにいく。

そういうシンプルなルールに支配されているなかで、どこまで支援することができるだろうか。

働けるが、何をすればいいか分からない普通の人を守ることを中心に据えるべきではないだろうか？

働かない人を、働いた人と同じように支えることは無理があると思う。

病気ならば、それは本人の努力でどうにかならないから、「どんな子どもが生まれても、安心して育てられる」という保障をすることで、子孫繁栄を揺るがないものにするという意味で、一理ある。

しかし、意志の問題なら、それも「そんな風に生まれたのだから仕方がない」と言えるだろうか？

意志薄弱で、努力してもどうにもならないかもしれない。

何かのきっかけで変わるかもしれない。

分からない。

見殺しにするのはかわいそうだが、支えることを求められたら、厳しい判断をしなければならない。

「負け」状態にある人を、「勝ちと同じにする」を前提にすることは、バブルが続かない限り、無理ではないか。

ルールに従うなら、村の指導者たちに見守られて暮らせるが、ルールを守ることを拒むなら、守りようがないのではないか？

自分勝手に支援し続けることは、福祉とは言わないだろう。

なぜなら、誰でも何らかのルールに縛られているから、完全なる自由などない。

会社勤めなら、就業時間に縛られている。

そういう立場から解放されて自由になっても、ゴミ出しのために起きる必要がある。

「何もしていないから、何でも許されて、守られている」という状態は、守ってくれる人がいなければ成り立たない。

自立していないから、好き勝手できる。

勝負してないから、負けない。

それを認めることは、できないと思う。

好きなら許せても、他人は許せないだろう。

許さずに追いつ詰めて、街中に放り出したら、何をするか分からなくて、治安が悪化するかもしれない。

いらぬものを与える関係を作って、共存できるかもしれない。

分からない。

もし、知らない人にピンポンされて、「お腹がすいたので、何か食べさせてください」と言われたら、玄関のカギを開けるだろうか？

わたしなら、怖くて開けられない。

そもそも、ちょうど食べきるくらいしか作らないから、余らない。余っていたとしても、本当に食べ物を受け取ったら去るのか、強盗が物乞いのフリをしているのか分からない以上、争ったら絶対負けると分かっているのに、鍵を開けることはしないだろう。

そうなる、もらえるのは、あまりが出る「店の裏口」に限られてくるだろう。

公的支援がなくて、冷蔵庫もないころには、そういうことが実際にあったという。

その状態を公的支援を行うことで、なくした。それを復活させることは、歴史に逆行する悪行なんだろうか。

国営がだめで、民営化したのなら、保護区の運営もうまくはいかないのだろうか。

結局、リーダーが現れるかどうかにかかっているのなら、「勝利」を自分の手でつかめないために、他人に賭けるしかない「悲哀」を感じてしまう。

自由区しかない状態から、保護区を作って、選択できるようにする。

「共同体の一員として生きる」という選択肢を提示する。

その上で、共同体の一員として生きるか、自分の力で生きるか、資格があれば40歳までに選ぶことができる。

「自由な個人として好きに生きることを認めた上で、結果平等を保障することはできない＝自由と平等は両立できないし、自由を認めるなら結果責任を認める必要がある」と誰かが言わなければ、先に進まないような気がする。

自己責任を問うなら、従うことで守られる「加護」が選べる必要があるではないか。

舵取りをするリーダーを持って、その人の決めたことに従って生きること加護を受ける生き方と、自分で自分の人生の舵を取る生き方は同時にはできない。

どちらかを選択する必要がある。

指導的立場にあっても、保護区の月のお小遣いは5万円で変わらない。

村の運営の予算を最終的に決める権力があっても、それで自分のものを買ったら、すぐにばれる。

基本的に、名誉ややりがいがあるだけで、役得があるわけではない。

自分の考えを説明して、みんなに同意を得て、リードしていくことは大変だけど、そういう人物が村の運営を引き受けるからこそ、成り立つ制度と言える。

誰がリーダーになるかは、話し合いで決める。そして、最終的に、大人全員参加の投票で決まる。

一度親から引き離して、自分の力だけで生きる必要があると思う。

寮だから、料理ができなくても、食べさせてもらえる。しかし、掃除や洗濯は自分でしなければならない。勉強も仕事もある。そういうルールに縛られた状態の中でしか、自分は見えてこないのではないだろうか。

そんな生活は嫌だと思ったら、自由のある自由区を選べばいい。

守られて生きたいと思うなら、加護のある保護区を選べばいい。

しかし、リードする人がでないと、どちらも成り立たない。

なぜなら、自分ではできないことを集団の恩恵として受けている以上、自己責任を問われたらどうにもならないからだ。分かるはずがないことを自分で頑張れと言われても、どうにもならない。

だからといって、原始的な暮らしに戻るための土地も知恵の継承もない中、自然の中に放り出されたら生き抜くことができない。狩猟と採取の生活で生き抜こうと思ったら、丈夫で賢くなければまず無理。弱ければ、敵に襲われたり、食べ物が見つからずに死んだりする。病気になっても直してくれる人もいない。

勉強だけしていて、生活に関わることは何もせず、働くことも知らないまま、時間だけが過ぎるのが、一番怖い。

なぜなら、勉強とは、概要を知っただけで、具体的にこなせる状態にないから。

勉強を仕事にしない限り、生活や働くことが最終的に毎日することになる。

テストでよい点を取る方法を身につけたことを生かして、家事や仕事に役立てることを普通は期待する。

しかし、最初に覚えたことだけでいっぱいになってしまって、応用できず、今更新しいことが身につかない状態になったら悲惨だ。

頭はいいが、何の役にも立たない。そんな状態になってしまう。

「努力はするが、勝負はしない」では、何にもならない。

だから、「勝負」の時を早い時期に与え、「勝利」を経験することが求められると考えている。

当然、試験に受からず、希望の仕事につけなかった、という「負け」を経験する人も出てくるが、それを13歳で知るか、22歳で知るか、なら、早い方が良いのではないだろうか。

遅咲きの人もいるが、それは仕事を続ける中で、目覚めていくタイプであることが多い。何もしないで、何か変化することはない。

思春期は難しい時期だから、寮で寝ていて、仕事にも行かず、勉強もしない子どもも出てくると思う。

そしたら、15歳までは寮で預かるけど、卒寮資格は与えないし、労働の報酬の30万も与えない。

保護区には入れないから、自由区に行くことになるが、入寮中に住まいや仕事が決まることもない。

何もないまま、いきなり自由区に放り出される。

個人的に助ける人は出てくるかもしれない。しかし、公的な支援はない。

他人の中に入って、そこまで甘えた態度をとる子どもが大勢いるとは考えにくい。

それでも、反抗期まっただ中だから、逆らう子どもも出てくるだろう。

自由区に放り出されて、悪い人に利用されてしまうかもしれない。

どんな人に出会うか、運次第。

それでも、どこかで突き出さなければならぬのなら、早い時期に行く方がよいのではないだろうか。

必要なことは堅実だから安い。

運営することは難しいから誰でもなれるわけではないので、その分、報酬が多い。

しかし、教えられたとおりに働いても、誰でもできることなら変わりはいくらでもいるので、安い方へ、安い方へと流れていく。そして、仕事がなくなる。

そのグローバリズムの流れを止めるためには、「必ず使ってくれる人」を決めて、「絶対に役立つ仕事」を確保することだと思う。

中心となるのは、保護区の人々。

保護区の人々のために、子どもたちやサポート労働者が作ったものを、自由区でも販売する。大量生産で安く作れる利点を生かす。

最先端の冷蔵庫が売っていても、それを買う人は限られている。

多くの方は、安定した技術が確立した、一番手ごろな安い冷蔵庫を買う。

そういう「生活の基礎になる技術」は、既に確立されている。「これだけあれば十分便利に暮らせるだろう」という技術は出そろっている。

別にAIに管理されたすごい家電を使う必要は全くない。今の状態で不自由してない。

その安定した技術力を生かして、「現代の暮らし」が「昔の人の暮らし」と呼ばれる状態となり、「基礎技術を継承する助けになること」を目的に続けられてもよいのではないだろうか。

個人的に、掃除機をかけることは嫌いだが、自分一人なら、多少ほこりがたまっていても気にしなければ済んでしまう。

子どもの世話を引き受けているなら、そういうわけにはいかない。あちこち触るから。

でも、冷蔵庫や洗濯機や電子レンジや給湯設備やエアコンやら、一人暮らしで最低限そろえる設備さえあれば、人は生きていけるのではないだろうか。

結局、高くても買えないなら、選べなくても問題ないのではないだろうか。

自分は才能があって、儲けることができると思うなら、決められたことを決められたとおりにする暮らしではなく、自由裁量のある仕事をしたらいい。

あるいは、起業したり、フリーランスになってもいい。

最先端のものを買う人もいてもいい。

しかし、それは成功して、お金がある人に限られるのだから、基礎技術を使って商品を提供し

てくれる仕組みがあってもいいと思う。

それは、安物ではない。しっかり考え抜かれた良品。そうでなければ、技術継承の役割を果たさない。

新しい技術が標準化すれば、それを取り入れて、改良することもする。しかし、それは技術が安定してからでよい。特許を失ってから対応してもよい。ゆるやかな変化に対応できる場所であるべき。

木造平屋建ての「キッチン兼居間、寝室、物置、風呂とトイレ+屋根のある洗濯干場」がある家を標準としよう。

保護区の村には、センターと呼ばれる木造の大きな建物があって、受付や調理室や食堂や医務室や図書室や区長執務室や客室や風呂とトイレと教室と保育室などがある。地震があったら困るから、高くしても2階くらい。できれば平屋が望ましい。

家もセンターも、耐震構造にする。地震からは逃れられない運命の国だから。

しかし、耐火構造にはしない。それは注意で予防できることだから。でも、家事が起きてしまった場合に備えて、家と家の間隔を開けることはする。

タバコは禁止。ガスは風呂だけで、キッチンはIH。火を使う場面を極力少なくする。なぜなら、30人しかいない村で家事が起きてても、消火に当たることは難しいから。救援も期待できない。だから、極力火の出ない仕組みを作る。それでも、漏電などで火事起きるかもしれない。だから、延焼しないように間隔をあけて建てる。

食事は調理室で作られて、食堂で食べるけど、それだけではお腹がすくかもしれないから、自宅で好きなものを食べることができる。お小遣いの範囲なら。

冷たいお茶だって飲みたいだろうから、冷蔵庫も必要だろう。調理するなら、IH設備も必要だ。風呂も共同にしたら感染症が怖いから、個別にあった方がいいだろう。トイレも洋式のシャワー付きを標準にしたい。

壁掛けテレビもいるだろうし、ベッドもいるだろう。布団もいる。タオルなどもいる。食器類もいる。

それら全てを、自由区の会社が委託で、子どもたちとサポート労働者を使って生産する。

一緒に働く中で、見どころのある子どもをスカウトしてもいい。

子どもは、仕事を中心にして、いろいろなことを勉強していく。もちろん、一般教養も教えるが、それは、12歳までに終わらせる。概要を知るだけなら、12歳まででも理解できるだろう。

もっと詳しいことを知りたい、もっと勉強したいとなったら、管理区の試験を受けて勉強する

道をつかみ取らなければならない。

自由区にある学校に入るためにはお金がいるから、自分が働いてお金を貯めるか、親に出してもらうしかない。

誰にでもチャンスが開かれているが、狭き門なのは、管理区のエリートコースを歩むこと。給料をもらいながら勉強するかわりに、仕事もしなければならない。

それ以外の人には、労働者や生活者としての技術を学ばなければ生きられないのだから、「趣味」として勉強するならカルチャーセンターでお金を出して学べばよい。ネットを通じて習うこともできる。通信教育という手段もある。

「これだけあれば十分」という状態がすでに出来上がっているのだから、それを作る技術を継承することをまず考える。

そして、作ったからには使ってくれる人が必要なので、使う人を保護区で確保する。

そこから更に先に行くのは、自由区でいい。ドラえもんが描いたような、ロボットのいる未来世界を到来させることもできるだろう。しかし、それを標準にする必要はない。

なぜなら、高度になればなるほど、何もできない人が増えて、「物はあるけど買えない」という状態が出来上がってしまうから。

現代的な暮らしは、ブラックボックスで、どういう仕組みで動いているのかさっぱり分かっていない人が多い。でも、操作はできる。

つまり、もはや技術者として参加することは不可能な状態を作り出している。

もっと進んで、完全機械化するかもしれない。それでも、人の手がいることがゼロにはならないだろう。きっと誰でもできる単純労働の需要はなくなるならない。

物を作る工程だけじゃない。

家を作る工程でも、必要な木材を育てることや、加工する技術が求められる。サポートしてくれる便利な機械ができて、人手が完全にゼロ、「大工さんも要りません」という状態にはならないし、させない工夫が求められるだろう。

なぜなら、全てコンピューターに託してしまうことは、自由を奪われる恐ろしいことだから。

人が実際に実演できる技術を残すべきだと考えている。それは、人から人へ受け継げる。

しかし、コンピューター内部で行われる処理は、一度、それを読み解く技術が失われたら、全て失うことになる。

だから、「現代的な便利な暮らし」を「基礎技術継承」として受け継ぐ仕組みが必要だと考えている。

コンピューター文明が失われても、「現代」に戻るだけなら、いいと思わないか？

原始まで戻るわけじゃないなら、大半の人は生き抜ける。

できない人が大半になった技術に囲まれた世界で生きるとは、リスクが高すぎる。
使う人にはなれても、作る人になれなければ、使うものを買うことはできない矛盾に陥る。
だから、作ることに参加できる状態を残して、そこを「生活の基準」にする必要があるのではないだろうか。

今世の中にある、「手の出る値段の家電」に囲まれて、便利に暮らせたなら、不自由しない。
その暮らしを基準として、工場を設計し、技術者を育て、子どもたちに継承させることができたなら、「何をしたらいいのかわからない」という問題は解消しないだろうか。

「現代の暮らしを再現する技術を身につけるか、作業員として働くか」をすればよいのだから。

林業や農業や、山男の仕事も選べるし、料理の仕事も選べる。管理者として働くことも目指せる。

いろんな生き方がある。

使うものは決められているが、高級品はお金がなくて買えないなら、「選べない」としても結果は同じ。支払い能力以上の買い物をするのは、無理な相談。

一人一台配られる平均的な端末で、ネットに関することはほとんどできる。
でも、仕事となると、パソコンが必要だろう。プリンターも必要だろう。

ララは、体が弱いから、最初の3ヶ月の労働を免除してもらえる。
それでも、掃除や洗濯はしなければならないが、共同領域の掃除は免除してもらっている。
それで何の仕事に就くのか考えたけど、データ管理をパソコンでする仕事に就かせよう。そうすれば、区長補佐として、パソコンを使うスキルが役立つから。
立ち仕事ができない人向けの仕事をする。

ララは、パソコンの使い方を覚えられた。だから、事務限定で資格がとれた。
もしパソコンが使えなかったら、弱者認定されて、管理区でグループで暮らすか、それを拒んで自由区で自活するか、問われたことだろう。

結局、ララは、保護区行きが決まっていたにもかかわらず、自由区行きを宣言する大胆な行動に出るわけだけでも、そんなことをする子どもはそう多くはない。

もともと無鉄砲な性格。弱いくせに、「もしかしたら、できるかもしれない！」と突き進んでいく。

だから、体が弱くて、動けなくなるかもしれないのに、一人で自由区を旅行することもする。